令和６年度

【長期研究２】

トラウマインフォームドケアの学びの継続に関する研究

（第２報）

（要旨）

近年、児童福祉領域の支援者を対象としたトラウマインフォームドケア（TIC: Trauma Informed Care）研修の受講機会は増えている。しかし、研修受講後の課題として組織全体への TIC 定着の難しさも示唆されており、こうした研修等がどのように実践に適用され、組織全体への TIC 風土の構築に役立つかの検証は不十分だと言わざるを得ない。そこで本研究は、組織全体への TIC 普及の在り方に関する手法を検討することを目的に、TIC 研修等により学びを深めたのちに、組織全体として TIC の導入を実践した支援者や支援組織の取り組みを精査するため、半構造化面接調査を実施した。

その結果、研究協力者の逐語録の分析結果から示唆される、組織全体として TIC 導入を実践するうえで求められる点として、「Ⅰ.リーダーの存在」、「Ⅱ.職種内での周知と組織全体での共通認識」、「Ⅲ.多職種への展開と連携」、「Ⅳ.年間計画と施行」、「Ⅴ.アセスメントの視点」、「Ⅵ.支援対象者への心理教育としての展開」、「Ⅶ. 具体的実践への落とし込み」、「Ⅷ.変化の認識と共有」、「Ⅸ.支援者自身の振り返り」、「Ⅹ.環境構築」があげられた。

TIC 実践に求められる普及の在り方において、リーダー的役割の存在、年度をまたがる継続的かつ段階的、横断的な関与のもと、ケースに携わる多機関多職種とともに支援対象者とも共通理解を持ち続けるための工夫が求められることを提言した。

研究体制：酒井佐枝子、亀岡智美、加藤寛

Ⅰはじめに

近年、児童福祉領域の支援者を対象としたトラウマインフォームドケア（TIC: Trauma Informed Care）研修の機会が増えている。TIC 研修を受講した支援者が、その後の実践でどのように研修内容を活かしているかを検証した研究 [1]では、支援対象者への対応に活用するだけでなく、組織内での情報共有や上司への提案、ケース検討や研修機会の確保等を通して TIC を実践に結びつける試みがなされている。その一方で、研修受講後の課題として、トラウマの視点から物事を捉えることの組織内での抵抗や誤解、不安、業務量の多さと緊張する日常業務ゆえの組織全体として導入することの困難等が指摘され、組織全体への TIC の定着の難しさも示唆される。トラウマのある支援対象者に関わる際、支援者による支援対象者への再トラウマの可能性 [2]だけでなく、支援対象者のトラウマ体験に日常的に接することによる支援者の二次受傷等 [3]や支援組織への影響も念頭に置く必要がある。支援組織全体で TIC の視点を取り入れた支援活動を展開し、TIC の風土を構築し、トラウマに対応できることは、支援対象者にとって有益であるばかりでなく、支援者のパフォーマンスやウェルビーイングの向上にもつながる。

しかし、TIC 普及に向けた研修の充実 [4]や教育動画教材の開発が進められている一方で、こうした研修・教育教材がどのように実践に適用され、組織全体への TIC 風土の構築に役に立っているかの検証は不十分だと言わざるを得ない。

そこで本研究は、組織全体への TIC 普及の在り方に関する手法を検討することを目的に、TIC 研修・教育動画教材等により学びを深めたのちに、組織全体として TIC 導入を実践した支援者や支援組織の取り組みを精査するための半構造化面接調査を計画した。児童福祉領域の支援者に提供された研修・教育教材、及び実践への適用を聴取し、本邦における TIC 実践に求められる普及の在り方を提言することを目指す。

Ⅱ．方法

Ⅱ-1　対象と募集方法

研究協力の対象者として、

① 児童福祉領域における支援者であること

② TIC 研修を受講した経験があること

③ TIC を組織全体に普及するための実践を 1 年以上実施していること

④ 組織としての取り組みに関する複数の視点を得るために、同一組織より本人を含む 2 名以上で研究協力者として参加していただけること

を条件に、募集を行った。

研究協力対象者の募集は、当センターのホームページにおいて研究協力者の募集を 2024 年 7 月 9 日より 10 月 31 日まで行った。

Ⅱ-2　調査方法とデータ収集の方法

半構造化面接による個別インタビューを、同意が得られた対象者に対し、ウェブ会議システム（zoom）を用いて研究責任者が実施した。個別インタビューは、実施者と対象者双方のプライバシーが確保される場所で行われた。インタビューは対象者の許可を得たうえで録音した。得られたインタビュー内容は逐語録として文字化し、質的内容の分析を行った。

Ⅱ-3　期間

データ収集期間は 2024 年 7 月末から 11 月末であった。

Ⅱ-4　調査項目

基本属性として、年齢、性別、職種、職位、職務にかかる資格、専門職としての経験年数等を聴取したうえで、これまでの TIC 研修受講歴や教育教材活用歴について、それらを踏まえた TIC に関する組織内での取り組みについて聴取した。

Ⅱ-5　解析方法

個別インタビュー内容は逐語録として文字化し、テキスト型データ分析を行った。テキスト型(文章型)データを計量的に分析するために開発されたプログラムである KH Coder [5]を用い、帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリおよびテーマの生成を行った。

Ⅱ-4　倫理的配慮

研究協力者には、研究説明文を用いて、研究の目的と意義、方法のほか、研究参加の任意性、同意しない場合でも不利益を受けないこと、同意した後での研究協力撤回の保証、研究協力により生じる負担や予測されるリスク・利益に関する説明等、倫理的配慮について説明し、文書にて同意を得た。許可を得たうえで得た個別インタビューの録音データは、逐語録として文字化したが、その際に個人情報は一切入力しないこととした。

本研究は、兵庫県こころのケアセンター倫理委員会において承認を得て行った（倫理審査委員会承認番号 6-1 の 2)。

Ⅲ　結果

Ⅲ-1.　基本属性

研究協力者は 8 名だった。男性 4 名、女性 4 名で、年齢は 30 代が 2 名、40 代が 2 名、50 代が 4 名、現在の職場における経験年数は 1 年から 24 年（平均年数 8.45、標準偏差 8.96)、児童福祉領域における経験年数は 10 年から 29 年（平均年数 19.75、標準偏差 8.53）であった。役職は、副施設長 1 名、部長 1 名、主査 4 名、チーフ 1 名、主任 1 名であった。有資格（複数回答）は、公認心理師 6 名、臨床心理士 3 名、臨床発達心理士 1 名、児童心理司 2 名、

児童福祉司１名、社会福祉士１名、保育士１名であった。

Ⅲ-2.　頻出語の抽出

研究協力者全員の逐語録のうち、TIC 研修受講歴および、研修等を踏まえた TIC に関する組織内での取り組みについて KH Coder を用いて分析を行った。これにより、テキスト型データ内容の中から自動的に言葉を取り出す処理が行われる。この処理ではデータの内容をあらわすような語のみに注目するために助詞や助動詞をはじめ、どのような文章の中にも多く出現する一般的な語は省いて集計される。この処理により、記載内容について取り出された語の中で特に多く出現していたものを明らかにし、回答に特徴的な話題を抽出することが可能となる。基本統計量として、すべての語の延べ数である総抽出語数は 31,032、重複を排除した語の数である異なり語数は 2,238 であった。

テキストから自動的に取り出された語の集計情報を頻出語として確認した。

表１　頻出後上位 45 と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	117	自身	43	眼鏡	25
研修	115	ケース	39	親御	25
TIC	108	出る	38	多い	25
トラウマ	101	大事	37	知識	25
受ける	87	業務	36	行動	24
心理	84	児童相談所	36	分かる	24
感じ	82	感じる	35	作る	23
自分	80	組織	35	先生	23
職員	78	理解	35	必要	23
見る	69	持つ	31	センター	22
人	63	使う	28	継続	22
話	59	一時保護	27	変わる	22
視点	58	言葉	27	面接	22
難しい	47	考える	27	違う	21
聞く	46	部分	26	共有	21

Ⅲ-2.　共起ネットワークの作成

抽出語間の関連性を検討するために、出現パターンの似通った語について共起関係を表す線で結んだネットワークで可視化する分析を行い、共起ネットワークを描いた。なお、分

析にあたっては出現数による語の取捨選択に関して最小出現数を 15 に設定した。また、描画する共起関係の描画数は上位 60 語を対象とし、語同士のつながりを示す Jaccard 係数の値が 0.2 以上を対象とした。共起ネットワークの見方として、丸の大きさが語の出現頻度を表し、共起関係の強い語ほど太い線でつながっており、グループを形成する。

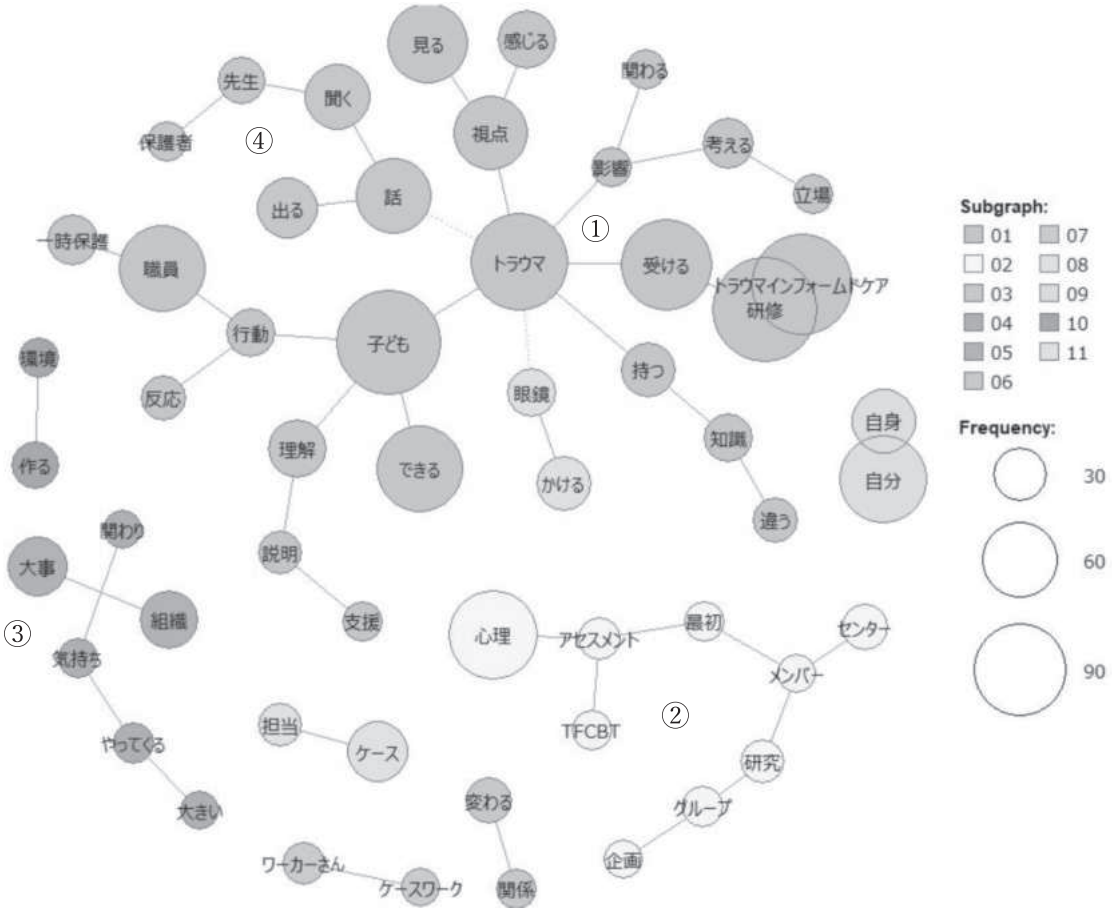

図 1　TIC 研修受講歴と組織内での取り組みの共起ネットワーク

中心性の高い語がどのような文脈で用いられ、グループを形成しているかを検討するために、その語の前後の文脈を一覧表示する Key Word In Context（以下、コンコーダンス）から引用し、つながりの強い部分ごとにグループ分けされた話題を抽出した。

まず、中心性の高い語「トラウマ」と「子ども」を中心につながるグループ①について、どのような文脈でそのほかの語とつながり、用いられていたかをもとに、各つながりの命名及び引用を表 2 に示す。

表２　グループ①の中心性の高い語とコンコーダンス

「トラウマの視点で見ることで生じた変化」	
トラウマ/視点/感じる/見る	・担当のケースを見る時に、そのトラウマの視点を持ってケース理解をするとか、それをワーカーさんだったり保護所の先生とか施設の方に説明するとかっていうようなことはやっているかなと思います。 ・次こういうことが起こってくるかもね、みたいな、ちょっと違った視点で、思考を変えるっていうか、そこを感じて対応できたりとか。 ・もともとその発達障害のこととか発達全体とか、発達障害だけじゃないな、発達とか愛着とかいうことだけじゃなくて、TICの視点で家族を見ようとか、起こっていることを見ようっていうのは、研修の効果もあるのかもしれませんけど、やっぱりその、通じる言葉が、通じる状態にはなっているのは、すごく、強いかなとは思っているところです。
「トラウマの影響をもとに考えることによる関わりの変化を考える立場」	
トラウマ/影響/関わる/考える/立場	・トラウマの影響を受けているということによる言動の変化っていうことにも理解があって、だからそれぞれ個々に応じた関わりが必要だっていう、そういう風な理解ができている。 ・自分が理解をした後に、保護者さんであるとか子どもさんには、どういう伝え方をするかっていうことで、子どもさんへの心理教育とか保護者の方への心理教育で、どういう伝え方をしたら一番抵抗なく受け入れていただけるかなっていうことについて考えました。 ・心理の中で、スキルアップしていかなきゃっていうことで、最初TICを学び始めようっていう頃に先生の話とかを聞いて、これ心理だけでやるやつじゃないなっていうところに気づいて、そこからどう展開していくかとかを考え始めるきっかけになったと思います。 ・そうしたら、こうなったねっていうのを、私たちは見てアセスメントしなきゃいけないと考えてます。 ・スーパーバイズも行う立場だったので、職員から子どもの行動面のことであったりとか発言とかで、こんな様子でしたっていうことを、報告を受けた時に、一緒に考える時に、研修の時のトラウマの話覚えている？と、そこで持ち出して、その反応があったのはなんでだろうねって、その時の前後に何があったのかとか、このケースってどんなケースだったかとかっていうことで。 ・継続的にリーダー的な立場で複数年接してる職員については、そういう視点の理解を現場職員とも、もしかしたらこういうこともあるかもしれないっていうところで検討してくれていたんですけれども、なかなかリーダー的職員も交代がこの3年間でも起きてしまったので。 ・次のステップとして、ケースとか生活見てる支援者もそうだけれど、生活見てる支援者についてもこちらから見ると、トラウマの影響をとても受けやすい立場にいるし… ・立場的に、ちょっとそういう相談を受けたりとかっていうことが多いので。

表２　グループ①の中心性の高い語とコンコーダンス（続き）

「TIC研修の受講とその後」	
トラウマ/受ける/研修/TIC	・初めて受けたのは、4,5年前ぐらいに初めて研修としては受けて、昨年度改めて同じ研修をもう1度受けて、ようやく少し触りが分かってきたような気がするみたいなところですかね。 ・1番のメインは、ワーカーさん含め、センターへのTICの普及　というところで社内研修をしたりとか、最近は心理士のアセスメント研修みたいなところもこう自前でやったりだとか、TFCBT、CPC-CBTを含め社内研修をしたりとか、色々ちょっと広がってる感じはあるんですけど。 ・こういう研修とか繰り返していくことで、トラウマインフォームドケアとかトラウマっていう単語とかが、関係者の間で使いやすくなっていってるなっていう感覚はあります。 ・今はもう職場全体として、職場は新任職員さんの研修とかにもTICの研修毎年入れてますし、一時保護所の職員さんにも毎年TICの研修をするようにしてますので、職場の理解は得られてると思います。 ・この時の研修の主催が、児童精神科のお医者さんとかがいて、クリニック業務とかもやっているような機関が研修主催だったので、研修の受講対象も幅広かったかなと思っていました。 ・親子支援とかする時に、なんかどうTICを生かしていけるのかっていうところが、今まさにちょっとどうしたのかな　ってこう狙ってるところでもあったり、そこで、T　さんに力を借りて、（中略）TICを取り入れたケースワークっていうところを、研修してもらってっていう中で、（中略）Tさんが具体例とか入れながら、こう説明してくださったので、なんかそういう意味では少し、具体にイメージすることが出来たのかなとは思うんです。

「職種、経験年数、サポート（SV）体制等による知識の浸透の違い」	
トラウマ/持つ/知識/違う	・（トラウマ）反応としてあるんだっていうのを、自信持って言えるっていうところも役に立ってるなって思いますね。 ・すでにトラウマの知識に基づいて、そういう子どもたちを見ていくっていうことは、児童相談所にいると、当たり前のようにあるなと感じています。 ・やっぱり学んできたプロセスも違うし、経験してきたところも違うけど、その中でどうTIC　をリンクさせていくかっていうのは、すごく育成の部分で大事かなって思ってて。 ・どんな相談を受ける組織なのかっていうところによって、TICの知識というかそういう風土が広がるかどうかっていうのも、結構そこが違うのかななんていう風に感じております。 ・自分のことを知りたいっていうので、診断もちゃんと知りたいという風になったりだとか、なんかすごい関係が、多分眼鏡をかける前の関わりだったら、そこでもっと関係が悪化してたのが、TICによって違う関係性になったなっていうのをすごく実感して。 ・個人が持っている財産をみんなで共有、シェアして、みんなが使えるようにしようっていうことは、昨年度からググっと変わってきて、よかったなあって思う内容なんだけど、やっぱり相談して、上司と部下の縦ラインだけじゃなくて、横のつながり、心理さんがやっぱり同じ方向性を持って大事だと思うことを、どうやって人と共有する工夫ができるかなとか、という意味ではすごく、支えられてる感じ、チームとしての凝集性とかは、すごくすごくいい感じだなって思っています。 ・基本的には全て役に立っているなとは思うんですけれども、私も担当のお子さん持って面接してとかっていうことをやっているので、個人の面接の中ではすごく役に立っているなというところはあります。

表２　グループ①の中心性の高い語とコンコーダンス（続き）

「子ども理解の視点とそれを説明し、支援に結びつける難しさ」	
子ども/できる/理解/説明/支援	・実際に、子どもと一緒にワークブック使って作成してみたりとか、リラクセーションの練習してみたりとかっていうことについては、すぐ実践に結びつけれたかなと思います。 ・やっぱり日常的に関わってる職員は、やっぱり、その子どもから受ける暴言とか、時には暴力とか出たりする子もいるんですけど、もうそれに疲弊したりとか、心が折れそうになったりとかしても、その子のそういう裏の部分とか、奥深い部分とかを見た時に、その辛さは、しんどさは、変わらないけれども、ちょっと理解できるというか。 ・所内でもTICについて説明する機会があったり、子どもにも心理教育とかもアセスメントする時の心理教育をしてたりだとか、子どもにも説明するのは、経験としても重ねてきたところもありました。 ・理想の心理職の専門性って何を期待されてるかっていうことを、やっぱり明らかにした方がいいだろうと思ったし、その子どもと家庭の問題が背景とか状態像をどう理解するかとか、あとどうしてこういう問題の構造になってるのかっていう見立てであるとか、あと実現可能な支援てなんだろうかとかいうことを、どうやってワーカーさんとか関係者と一緒に共同して作り上げていくかっていうのが心理診断だと思っています。 ・吐き出してそこに置いて終わりにするみたいなところで、支援者が受けたトラウマを組織的にどう改善するかみたいな発想のところにはなってない感覚です。
「一時保護所を含めた職員全体の“行動と反応の関係”への理解」	
子ども/行動/反応/職員/一時保護	・特に一時保護所の職員さんの話によりますと、どうしても子どもの行動、その問題行動っていう風に捉えがちだったところを、トラウマの影響っていう、この子も今までいろんなしんどい思いをして体験してきたことが、今、行動としてであるとか、その考え方として、こういう形で現れてるんだろうなっていうようなことはわかると、随分子どもへの接し方の職員さん自身の気持ちが変わってくるっていう話はよく聞かれます。 ・理論的なことをそれほど深く考えずにやってきたんだなっていう自己反省とかもあったので、TICの考え方を学んでからは、保護所とか養護施設の職員さんとかに広く知ってもらいたいなっていう気持ちがすごく強かったし、研修を受ける立場として一方的に教えられるんじゃなくて、一緒に考えてもらう姿勢で研修してもらった方が受け入れやすいだろうなっていうことで、自身の知識のなさでの自身の失敗体験を伝えようと思って。

次に、グループ②、③、④についても同様に、どのような文脈でそのほかの語とつながり、用いられていたかをもとに、各つながりの命名及び引用を表 3、4、5 に示す。

表 3　グループ②の中心性の高い語とコンコーダンス

「上位組織（県全体等）も統合した心理職全体で共通認識を持つための工夫」	
心理/アセスメント/TF-CBT/最初/メンバー/センター/研究/グループ/企画	・アセスメントするうえでは、TICの知識なり、心理教育なりが必要になってくるし、それ大事だよねっていうところは心理の中では、ほぼほぼ浸透してきてるのかなって思う ・最初は心理ばっかりで、まずは見立てをしていかないといけないっていうことで、アセスメントに力を入れてやっていて、徐々にケアだとか児相でもTFCBT出来ないかっていうところですね ・みんな出来るようになってほしいっていう思いが、例えばアセスメントでも、メンバーだけがアセスメント出来るじゃなくて、心理士全部がアセスメントは絶対取れた方がいいしっていう風に思ってたので。 ・庁内のトラウマに関するグループ研究を中心にやっているメンバーが実施してくれている研修に、受講している。 ・見えた方が、研修企画する側としては、すごくやりがいにはなると思うし、やって意味があったと思える。

表 4　グループ③の中心性の高い語とコンコーダンス

「組織として取り組むことの大事さと視点のシフト」	
大事/組織/関わり/気持ち/やってくる/大きい	・だから繰り返し触れていくっていうことは、本当に大事。 ・TICをケースワークに取り入れるっていうのは、よくわからないけど、組織の安全感とか、安心感って大事よねっていうのにはすごく共感できるというワーカーさんはいらっしゃいますね。 ・すごく人材育成が私の立場ではすごく大事だし、それを組織的に、別にコピー人間を作るではなくて、マインドとか姿勢とか、表現系は皆さんそれぞれでいいので、こういうところをポイントに大事にしよう、という心理診断の手引きをみんなで作りました。 ・一番は一時保護所の長というか一時保護所の責任者の方が、TICの学習会で勉強されたところで、今まで自分がやってきた関わりを振り返られてる中で、今までやってきたやり方は見直さなければいけない、と先頭に立ってそういう考えを示していただいたので。 ・メンタルヘルスとして愚痴はいいんだよとか、いろんな気持ちあるよねっていう話はしている。 ・非行に限らず、いろんな形で現れるんだなっていうことの理解がすごく進んだかなっていうところが、一番大きかったかなと思います。 ・年間計画みたいな形で、この時期にこういうことをやるっていうスケジュールを組んで、それと役割分担して担当を分けたりする、そういうところが大きいのかなって思います。

表 5　グループ④の中心性の高い語とコンコーダンス

「支援対象者や支援関係者とのTICの視点の共有」	
保護者/先生/聞く/話/出る	・幼稚園の先生とお話しした時も、保護者とお話しした時も、TICの視点は使ってるなと後から思うので、保護者とかに対する負の感情であってもいい感情であっても、こういう出来事がありましたねって共通してお話できる。 ・ケースワーカーは保護者対応がメインで、保護者の抱えているトラウマという視点はすごく持つようになって、（中略）抱えているトラウマの部分が非常に根深いものがあるのではないかと考えるようになりました。 ・こういうことがあると、こんな気持ちになることってあるんですよとか、こういう風な行動で出てしまうんですっていうのを、理論的にお話ができるってとこですかね。 ・ワーカーさんたちも結構研修に出てくれたりするので、そういう説明をすると、基本的には皆さんそうだよねって、理解を示してくれるし、こういう関わり大事だよねとかっていうような話にはなりやすいかなと。 ・ケース会議とかでも、その子のトラウマの部分ってどう評価するのみたいな話が、わりと当たり前に出るようにはなってきたなという風に思うので、意識していかないといけないというところは、日々感じてはいるんですけども。 ・だだ、養護施設でそういう出前研修としてTIC研修をして、（中略）ベテランの先生方とお話をすることがあって、自分が今までやってきたことを否定されてるような気持ちというのが正直にあったんです、みたいな話をして、ああそれは本当に分かります、一生懸命その信念や自負があってやって来られたベテランの職員さんほど、衝撃を受けるじゃないですけれども、今までの自分の関わりってすごくマイナスに働いてたんではないだろうかとかっていう意味では、正直ちょっとつらい。

最後に、上記 3 グループを除いた語のうち、つながりの強い部分について、右端から時計まわりに確認し、どのような文脈で用いられていたかをもとに、各つながりの命名及び引用を表 6 に示す。

表 6　その他のグループの中心性の高い語とコンコーダンス

「支援者自身の振り返り」（関わり、気持ち、組織としての方向性）	
自分/自身	・TICをみんなで勉強していくとか業務に反映させていくことは、実は特別なことじゃなくて、自分たちの業務の筋肉みたいなところというか基礎体力として必要な力だろうと、心理のみんなは思ってくれてるんじゃないかなと思います。 ・自分のやってきたことに対して真摯に向き合っているからこそできることなのかなと思いますし、自分の失敗体験を話すことができる職場だったっていうのは、すごく大きいと思います。
「共通言語の獲得：トラウマのメガネをかける」	
眼鏡/かける	・トラウマの眼鏡をかけて、子どもや親御さんに対しても、向き合っていかないといけないというところが、すごく印象として残っていて。 ・ちょっとそれ、トラウマの眼鏡かけて見てみようよ、みたいな感じで言うと、あ、みたいなとかがあるので。 ・トラウマの眼鏡かけて、やっぱりこの子見たら、こういう背景とかあるよね、みたいなのとかはありましたね。
「関係の変化」	
変わる/関係	・実際に子どもと会う時に、トラウマの眼鏡をかけて会う中で、すごく印象に残ってるのが、知識でトラウマの眼鏡をかけて子どもと関わると、関係性も変わることは頭では分かっていたけれど、なんかそれがこう、実感として持てた時に、あ、これかみたいなのが、知識と実際との経験、体験がマッチしたなっていうところが、良かったなって。 ・研修とか繰り返していくことで、TICとかトラウマっていう単語とかが、関係者の間で使いやすくなっていってるなっていう感覚はあります。
「担当ケースでの取り組みに限定される」	
担当/ケース	・どうしても担当職員は自分の担当ケースが中心になってしまうんですけども、年度初めに今年度こういう形でTICの取り組みやっていくよみたいなものを示すことによって、各担当も役割を意識して行動できるのかなっていうのは思います。
「他職種（ワーカー）やケースワークに取り入れる難しさ」	
ワーカーさん/ケースワーク	・担当のケースを見る時に、トラウマの視点を持ってケース理解をするとか、それをワーカーさんだったり保護所の先生とか施設の方に説明するとかっていうようなことはやっているかなと思います。 ・なかなかトラウマを学んでいこうとか、それをどう深めていくかは、まだ入り込んでこないところもあるので、意識としては高まっているけども、部門としてこれに向けてこうしようっていうところはまだまだ足りてない。（中略）トラウマとケースワークの絡みでの難しさに、ドツボにはまっている感はちょっとあるかもしれないです。
「環境を作る」	
環境/作る	・一時保護所の、家庭ではない環境に置いた時に、安心できる環境ってつまりトラウマの視点を持って見てくれる大人がいるってことだと思うんです。

Ⅳ　考察

Ⅳ-1.　研究協力者の属性について

本研究は、TIC を組織全体に普及するための実践を 1 年以上実施していることを研究協力参加の条件とした。研究協力としてエントリーした研究協力者は、児童福祉領域における経験年数も 10 年以上であり、また中間管理職以上の立場の者が、組織内に TIC を導入・実践するためのリーダーシップを発揮していることがわかった。加えて、本研究における研究協力者の職種として心理部門における支援者が多く占めた。TIC 研修の受講者は、心理系支援者が多い傾向にある [6]ことから、持ち帰った研修内容をこうした支援者が職場内に伝達していることが示唆されるとともに、支援対象者への心理的支援を提供するうえで TIC をもとに実践する必要性を認識していることが示唆される。

Ⅳ-2.　共起ネットワークからわかること

本研究は、TIC 研修受講歴、およびそれらを踏まえた TIC に関する組織内での取り組みについて聴取し、本邦における TIC 実践に求められる普及の在り方を提言することを目的とした。

逐語録の分析結果から示唆される組織全体として TIC 導入を実践するうえで求められる点として、「Ⅰ.リーダーの存在」、「Ⅱ.職種内での周知と組織全体での共通認識」、「Ⅲ.多職種への展開と連携」、「Ⅳ.年間計画と施行」、「Ⅴ.アセスメントの視点」、「Ⅵ.支援対象者への心理教育としての展開」、「Ⅶ. 具体的実践への落とし込み」、「Ⅷ.変化の認識と共有」、「Ⅸ.支援者自身の振り返り」、「Ⅹ.環境構築」があげられた。

TIC は「逆境体験やトラウマなど、こころのケガにつながる体験をした人への理解と思いやりある環境を、科学的知見により得た知識を通して構築する基本概念 [7]」である。したがって、トラウマとその影響に関する理解が徹底され、支援対象者の環境を安全なものとするには、支援に携わる関係者・関係機関全体で TIC を構築することが求められる。TIC 研修を通した学びは、組織内の伝達研修や回覧等を通して伝達され、そして TIC の必要性を認識する TIC 先導者が組織内での周知・実践への導入を促進する役割を担う。本研究における研究協力者はいずれも組織内での TIC 先導者として、どのように TIC を根付かせるか計画し、賛同する仲間や同じ職種内での学習会等の小規模な形を経て段階的に組織的な取り組みへと発展させていく、あるいは組織内全員が参加できる形で所内 TIC 研修を計画実施する形をとっていることが特徴として浮かび上がってきた。そうした意味において TIC 普及を担う中心的役割としての「Ⅰ.リーダーの存在」は不可欠であることが示唆される。こうしたリーダーを中心に、「Ⅱ.職種内での周知と組織全体での共通認識」へと広がっていく。そして、支援対象者に関わる他職種や連携機関とも共通言語をもとに共通理解をはかるために、児童福祉司や一時保護所職員、保育士等に対して研修等への呼びかけを通して TIC の波紋を広げていく様子が語られた。こうした「Ⅲ.多職種への展開と連携」を含むプロセ

スを通して、支援対象者のとらえ方が変化し、支援対象者との関係性も変化していくこと、共通言語で語ることで支援者間のケース検討がスムーズに進むといった利点が語られた。加えてTICという共通の指針を持つことによる組織としての凝集性についても語られ、TIC実践の年数を経ることを通したTICを基盤とする支援対象者および支援者同士の関係性の構築という肯定的変化をもたらしていることがわかった。

もちろん、こうしたプロセスの進行度合いや知識の浸透の違いは、職種や経験年数、TICの取組に対するサポート体制の有無により異なることも指摘された。こうした展開は一朝一夕に達成されることではない。TICをどのように実践に適用するかのわからなさや困難、これまでのやり方を否定されたかのように感じるゆえの抵抗、TICは支援対象者への心理的支援を行う心理職に求められるものでありケースワークにどう取り入れるかはわからない等といった雰囲気も、導入当初みられたことが同時に語られた。こうした抵抗や混乱、困難は当然生じるものとして丁寧に聞き取り、どこからその抵抗は生じているかを知識とともに実感を通して受け止めることが求められる[8]。TICという新しい基本指針に触れること自体が、これまでよりどころとしてきた専門性をもとにした解釈や信念を揺さぶる“脅威的な出来事”となりうることがある[8]。脅威に遭遇したときに自身がとる防衛反応として、戦う・逃げる・凍り付く・迎合するといったことは当然生じることである。TIC導入は、支援者自身の安全・安心が守られる中で行われることは大前提といえる。したがってTICに触れることにより、支援者に何が生じるかに関する科学的知識をもとにした理解を、支援者個人だけでなく、組織全体に生じることとして、トラウマの視点から「トラウマのメガネ」をかけて全体で認識することは、TICを導入する組織においてモニタリングする必要があるプロセスといえよう。こうした点から、組織全体として取り組むことが重要といえ、そのための「トラウマのメガネをかける」という共通言語の獲得が求められる。「Ⅰ.リーダーの存在」は、TIC実践に向けた年間計画と施行といった管理先導的役割だけでなく、こうした困難を認識し、その障壁を取り除くためにできる実践について、組織内で真摯に話し合える風土を構築するうえで欠かせない。仲間の話に耳を傾け、自身の失敗体験をもとに、生じている事象で何が起きているかを「トラウマのメガネ」をかけて共にふりかえる。権威主義に陥ることなく、適切なリーダーシップに基づいた前向きな話し合いと提案[8]を行える「Ⅰ.リーダーの存在」は、TICが環境として根付くうえで必須の土壌である。本研究では、同一組織内から2名以上の研究協力者に協力いただいた。リーダー的役割を担う研究協力者以外の研究協力者からの聴取においても、こうしたリーダー的役割を担う者の熱意と適切なリーダーシップが良い循環を生んでいることが語られた。

TICを組織的に展開する上で欠かせないのが、「Ⅳ.年間計画と施行」であった。新任研修の一環として毎年TIC研修を実施することや、昨年度の学びに応じたスキルアップのための継続研修や学習会を実施すること、多職種に広げるための研修形態の工夫、外部の専門家との定期的なケースカンファレンス、研究実施等の工夫が語られた。加えて、研修や学びの企画を担当制にすることで主体的に活動することを奨励し、TICの根付きと共通認識を促

進する工夫も語られた。研修機会を単発的な学びで終わらせることなく、こうした年度をまたがる継続的、かつ段階的、横断的な TIC 実践は上席の理解と決断、予算の獲得、各年度における成果の公表等、様々な工夫がなされることで可能となっていた。

アセスメントに TIC の視点を取り入れることの重要性は、多くの研究協力者が語った点であった（「Ⅴ.アセスメントの視点」）。ケースを見立て、支援の方向性を決めるうえで、アセスメントは重要な指針を示す。子どものトラウマ治療のゴールデンスタンダードであるトラウマに焦点化された認知行動療法（TF-CBT：Trauma Focused Cognitive Behavior Therapy）に関する言及も見られたが、この治療法にはトラウマの視点から症状を理解するための心理教育や、症状への対処スキルとしてのリラクゼーションや情動調整、認知的なコーピングスキルといった段階が含まれており、こうした内容が TIC の視点そのものであることに起因する。心理教育は、支援対象者と TIC を共有する最も有効な方法であり、支援対象者自身に起きていることを「トラウマの視点」から認識することで、よりよい対処方略を支援者と支援対象者がともに安全に見いだすことが可能となる。「トラウマの視点」から適切なタイミングでアセスメントと心理教育が行われることで、支援対象者の再トラウマが予防されるとともに、「Ⅵ.支援対象者への心理教育としての展開」がしやすくなる。こうした当事者自身が自分について知り、どのような対応の選択肢があるかについて主体的に選択できる話し合いは、トラウマインフォームドなアプローチにおける主要原則として重視される協働と相互性にあたる [2]。子ども理解の視点として TIC を用い、支援に結びつけることやケースマネジメントを行う難しさが語られる一方で、担当ケースでの取り組みに限定されるものの、こうした視点の「Ⅶ. 具体的実践への落とし込み」を通して、子どもの言動への理解の深まり、つながりの変化など捉え方が変化し、良好な関係性へと移行する実感も語られた。そして同じ職種内だけでなく、組織内の職種をまたいだ取り組みや関係機関も巻き込んだ様々な取り組みを通して、困難だけでなく肯定的な「Ⅷ.変化の認識と共有」が語られた。これは「Ⅸ.支援者自身の振り返り」、すなわち支援者自身が支援対象者や支援関係者との関わりについての変化や自身の気持ちの変化、組織としての方向性に対する認識を意識する機会が増えることを通して、実態としての変化に結びついていることが示唆された。支援者は子どもの環境そのものである [9]。特に一時保護等子どもの養育環境の変化が伴う措置を行うことがある児童福祉領域においては、子どもの安全・安心が保証される環境を構築することは不可欠といえる。組織全体として TIC を普及する上で、TIC を柱とした「Ⅹ.環境構築」は必須といえる。

Ⅴ　今後の課題

本研究は、限られた研究協力者の逐語録を元に、組織的な TIC 普及に求められる有り様を検討したものであることから、一般化することはできない。しかし、本研究協力者は、本邦において先駆的に TIC を組織全体あるいは都道府県内に普及させる取り組みを行っている先導者であり、革新的な取り組みが良い循環を生んでいる好例といえる。こうした実践的

展開が行われている取り組みについて、その実態と課題を今後も研究として蓄積し、本邦における TIC 実践に求められる普及のあり方をより洗練させていくことが求められる。

引用文献

[1] 酒井佐枝子, 亀岡智美 , 加藤寛, “トラウマインフォームドケアの普及に関する研究ー支援者及び支援組織の安全・安心な環境構築に求められる視点とはー（第 3 報）,” *兵庫県こころのケアセンター研究報告書ー令和 4 年度版ー,* pp. 77-89, 2023.

[2] Substance Abuse and Mental Health Services Administration, *SAMHSA's concept of trauma and guidance for a trauma-informed approach.,* S. A. a. M. H. S. Administration, 編, HHS Publication No. (SMA) 14-4884. Rockville, MD, 2014.

[3] 酒井佐枝子 , S. Bloom, *支援者が抱える課題とトラウマインフォームドケア導入の工夫,* 日本子ども虐待防止学会第 25 回学術集会抄録集, 62, 2019.

[4] 酒井佐枝子, 亀岡智美 , 加藤寛, “トラウマインフォームドケアの普及に関する研究ー支援者及び支援組織の安全・安心な環境構築に求められる視点とはー（第 2 報）,” *兵庫県こころのケアセンター研究報告書ー令和 3 年度版ー,* pp. 95-111, 2022.

[5] 樋口耕一, “テキスト型データの計量的分析ー２つのアプローチの峻別と統合,” 第 巻 19, 第 1, 2004.

[6] 酒井佐枝子・亀岡智美・加藤寛, “トラウマインフォームドケアの普及に関する研究～支援者及び支援組織の安全・安心な環境構築に求められる視点とは～,” *こころのケアセンター研究報告書,* pp. 95-111, 2021.

[7] 酒井佐枝子, “トラウマインフォームドケアートラウマの視点から環境を創るー,” *臨床精神医学,* 第 巻 54, 第 1, pp. 11-18, 2025.

[8] S. L. Bloom , B. Farragher, Restoring Sanctuary: A New Operating System for Trauma-informed Systems of Care, Oxford University Press, 2013.

[9] 酒井佐枝子, “トラウマインフォームドケア(TIC)の視点で考えるコロナ禍の子どもとその家庭のこころの健康,” *保健師ジャーナル 78(2),* pp. 128-133, 2019.